

熱に浮かされ溶けた意識が段々と組み上がっていく。夢を見ているみたいだった。

悪夢ではない。決して。

あなたに強く抱きしめられ、あなたを心身の奥底に受け入れることが、こんなにも嬉しいことだったなんて。知らなかった。

私の身体がこんなに綺麗だったなんて。

私の心がこんなに安らぐなんて。

私の心臓がこんなに熱かったなんて。

甘くどろけていた四肢の感覚が、緩やかに蘇ってくる。

私の心を甘く満たしていた熱情がゆっくりと休まっていく。いく。

私の鼓膜を甘く震わせた礼士さんの荒い呼吸が段々と静まっていく。

汗が退く。少しずつ身体が冷めていく。

私はゆっくりと身体を横向きに寝転がる。眼鏡を外し、素の礼士さんの垂れた眼差しに、優しく私の四肢が写る。

「痛くなかった？」

私は自分でも見たことのない、穏やかな笑みを浮かべて礼士さんの腕を取った。恋人の瞳に宿るその顔の中には、恐怖も、嫌悪も、辛苦も、微塵も感じられない。

「そっか……良かった。良かったよ。瑞穂さんが傷付かなかったのなら」

ふふ、と私は微笑んでゆっくりと起き上がる。皺の深い湿ったシーツに、また新しく皺が刻まれる。

「お風呂入りましょうよ、礼士さん」

先に歩こうとしたけれど、気が変わった。礼士さんが起き上がると、私は大きなその手を取った。

瑞穂さんの四肢は、折れてしまわないかと怖くなるほど細い。僕の腕の中で、彼女は荒い呼吸の合間、声帯を高く震わせながらひたすらに僕を呼び求めた。

脱力した瑞穂さんの上から沈めていた腰をそっと退き、ずっしりと膨らんだ避妊具を取り外す。

下腹部の快感が薄れるにつれ、僕は段々と背筋が冷え、古傷が目立つ彼女の身体に目をやる。どこかに新たな傷を刻んではいけないか、彼女の表情は過去という亡霊で歪んでいないか、と。

瑞穂さんはか細い声で呻き、僕の方に寝返りを打った。何か憑き物が落ちたかのような穏やかな表情に、僕はおぼろげと問いかける。

南風 こまち

幕間5〜6

足し合わせて夜 すれ違って雪

「瑞穂さん、その……大丈夫？ 痛くなかった？」

天使は柔和に微笑み、頷いて僕と腕を絡ませる。

赦された。

僕は、瑞穂さんに触れてもいいのだ。

張り詰めていた最後の糸がほどけ、僕はようやく満ち足りることができた。

瑞穂さんはゆっくりと起き上がった。艶めかしい色合いをした照明に、ほとんど肉のついていない彼女の身体が色合いよく照らされる。すらりとして起伏に乏しく、うっすらと骨格の浮いた瑞穂さんの四肢を目にすると、何度でも抱きしめたくなる。

「お風呂入りましょうよ、礼士さん」

瑞穂さんはそう言っ、僕の手を取る。細い指、薄い掌を愛おしむように握りしめる。

僕は少し引つ張られるように起き上がる。見下ろす瑞穂さんは、僕が思っていたより大きく見えた。

*

風呂にも様々あるけれど、ジャグジーや泡風呂は大人になっても楽しいものだ。パートナーと二人で少し迷ってから、今日はジャグジーだけにすることにした。

「あ、あああ………いてて」

礼士さんは広い浴槽に身を横たえ、大きく伸びをした。少し背中を痛めたみたいだ。

「大丈夫？ 見せて」

私はやや強引に礼士さんの上半身を引っ張り上げ、背中を見る。大きくて白く筋張った背中には、所々に小さく私の爪痕が残っている。

「ごめんなさい、爪を立ててしまつて」

「これくらい平気だよ。瑞穂さんもほら、入つたら？」

優しい声に誘われるように浴槽を跨ぐと、噴き出す泡の感触がくすぐったくも心地よい。私は礼士さんの大きな体の間にすぼまるように、身体を湯に浸していった。

「狭くない？」

「ええ、少し。でも居心地は最高」

礼士さんの太く筋肉が浮いた両腕が、後ろからそっと私を抱き寄せる。私は恋人の厚い胸板に背を預け、肩まで湯に浸かる。

「私ね、後ろを取られるのが嫌いだったのよ。何をされるのか分からなくて」

「うん」

私は礼士さんの首筋に頭をもたせた。

「でも、あなたにこうやってされるのは、大好き」

礼士さんは何も言わず、優しく私の頬をなぞる。私もその手を取る。丁寧にやすりがけされた短い爪、太くごつごつした指。私の表皮を隅々まで、内側まで慈しむようになぞって染めた、あなたが。

*

泡が立つ湯船に浸かると、背中が軽くしみた。瑞穂さんを抱いている時に、爪を立てられたみたいだ。彼女はばつが悪そうにしていたが、大したことではない。

「瑞穂さんもほら、入つたら？」

彼女は細い身体をしなやかにくねらせて、おずおずと僕の両脚の間に収まった。ほっそりした背中には肩甲骨と背骨、脇腹には肋骨が薄く陰影をもたらしている。

君はその背中に、何を背負っているんだい？

君はその背中に、何を秘めているんだい？

聞いてみたくはあるけれど、でも、口にしたら壊れてしまいそうだ。

だけど、目の前のあなたは、そんなにやわな人間だとは思えない。

迷いを棚上げしようと、僕は瑞穂さんに腕を伸ばして、抱き寄せた。瑞穂さんは少し身じろぎして、そして静かに僕にもたれてきた。

「私ね、後ろを取られるのが嫌いだったのよ」

少しひやりとした声で、ぼつりと語る。

「何をされるのか分からなくて」

僕はうんと一言返して、続きを促す。

「でも、あなたにこうやってされるのは、大好き」

瑞穂さんは僕の首筋に頭を預け、石鹸の甘い香りがする黒髪の隙間から表情が垣間見えた。眦を下げ、安らぎに満ちた笑顔が。

頬に手を伸ばし、触れる。少し跳ね返すような肌心地を、いつまでも味わっていたい。恋人はしつとりとした掌を僕の手の甲に重ね、僕の掌にすりすり頬ずりをしてくる。

もっと、ずっと、二人だけで。

*

初めてこの人に抱かれたのは、9月に入ってすぐのことだった。父の事を話した夜、礼士さんは私を黙って抱きしめるだけだった。

*

この人のぬくもりが私の心を溶かしたのか、初秋の夜私は礼士さんの部屋に遊びにいった。終電を運転して帰宅したばかりの礼士さんは少し驚きながらも部屋に上げられてくれ、私は昼前まで帰らなかった。

醜い。

貧相だ。

みすぼらしい。

そんな言葉の渦に飲まれ続けた私を、この人は綺麗だと言ってくれた。「ずっと伝えたかった」と添えながら。

最初は信じられなかった。その言葉を素直に受け止めるには、あまりにも長い間使い捨てられてきた。

初めて抱かれた時、正直、痛みはあった。怖気づいた。

気持ち悪さも隠し通せなかった。

でも、信じて、最後まで耐えることはできた。自分の意思で耐えきった。

礼士さんは、耐えさせたことに重く「ごめん」と言ってくれた。でも私は、いつでもこの人から逃げ出すことができる。あの日々とは違う。

今、私はもうほとんど怖くない。痛みや気持ち悪さはまだ少しあるけれど、それすらも愛おしく思える日が来ることを祈り始めている。

この人を愛し始めているから。

でも、胸を張ってあなたを愛することができる日は、

来るのだろうか。

私にそんなことができるのだろうか。

私の全てをさらけ出すことができるのだろうか。

*

*

南国にその血の系譜を持つ瑞穂さんの肌は僕より少し黒い。北国育ちの僕が白すぎるのかもしれない。

初めてこの人を抱いた初秋の夜から、僕は改めて彼女の虜になった。だからこそ、少しでも気を抜くとこの人を痛めつけてしまいそうになる。でも、気を張り詰めながら抱くと、かえって焦ってしまい、結局は同じことだった。

瑞穂さんは辛抱強かった。互いに手探りで触れ合う中で、たまに硬く憂いの表情を見せることはあっても、僕の手を払いのけることは無かった。

怖がられることもあった。気持ち悪がられることもあった。でも、そんなことは当たり前だ。瑞穂さんは男ではないのだから。それでも、いつしか僕の腕の中で微笑んでくれるようになった。

報いたい。いつしか、そう思うようになった。

もっと愛し合いたい、同じ先を見つめたい。そんなこと、瑞穂さんを抱こうとしたあの夜からずっと思っていることだ。けど、もうそれだけにはとどまらない。

瑞穂さんが覚悟を決めて僕と向き合ってくれている。その想いを踏みにじりたくはないし、正直に伝えたい。でも、僕にそこまでのことが許されるのだろうか。

瑞穂さんは何かを僕に隠している。古傷の目立つその身体の中に、何かを秘めている。僕が瑞穂さんに報いることは、その何かも正面から受け止めることだ。

報いたい、そう思うことはこの場合、知りたいと思うことだ。

でも、それこそが瑞穂さんの想いを踏みにじることになるのではないか。

瑞穂さん……僕は、どうすればいい？

*

*

お風呂でよく暖まった身体をバスタオルで拭き、秘部を下着の中にしてしまつていく。衣類を全て身に纏うと、礼士さんの大きな手が少しだどしく、でも優しく私の髪を梳き、ドライヤーの温風を丁寧に当ててくれる。

部屋の隅の電話が鳴る。そろそろ退室の時間だ。髪を乾かし、私たちはコートを着てエレベーターに向かう。

▼のボタンを押すと赤く光り、鋼鉄の扉の内側からくぐもつたモーターの音が聞こえる。

私の隣で、礼士さんがぼつりと口を開いた。

「……結婚したい、って言ったらどうする？」

時が止まったようにさえ思えた。エレベーターの階数表示の変化が、時の流れを主張している。

「……えっ？」

礼士さん。

あなたは、私と生き抜く決意を固めたというの？

私は、まだあなたに何も伝えていないのに。

私の脳裏を恐ろしい予感が駆け抜けた。

「礼士さん」

「うん？」

「……」

聞けなかった。

数々の事件のように、私の全てを見破ってしまったのか、とは。

ピンポン、とベルが鳴る。ガラガラと重い音を立ててドアが開く。

「乗りましょう」

狭いエレベーターの籠の中で、私は礼士さんに見えないようにそつと俯いて考えた。

私はどうしたいんだろう。どうすればいいんだろう。

*

*

まだ少ししつとりと湿り気が残るが、退室時間が来てしまった。風呂のぬくもりを閉じ込めるように外套を羽織り、部屋を出る。

瑞穂さんの細い後ろ姿を見ながら、考え込む。

あなたを知らないまま、共に生きていくことはできるのか。

でも、あなたの気持ちを乗り越えてまで知ること、あなたと共に生きることなのだろうか。

瑞穂さん。君を知りたい、って言ったらどうする？

瑞穂さん。結婚したい、って言ったらどうする？

「えっ？」

瑞穂さんが僕の顔を見上げる。驚いたような表情に、いつしか僕の心中が漏れ出ていたことを悟った。

でも瑞穂さんの表情は、どこか遠くを見るかのようなものだった。迷い、そして、その陰にひっそりと張り付いた恐れ顔。

「礼士さん」

瑞穂さんは僕に何かを訊こうとして、口を噤んだ。何かを迷っているかのように、じつと消灯するエレベーターのボタンを見ている。

鉄の扉が開くと、少しほつとしたかのような表情で「乗りましょう」と言った。でも、上る時は人目をはばからず抱き合うのちょうどよかつた狭さの籠の中で、彼女は俯いて靴のつま先を見つめている。

僕と瑞穂さんは、実は似た者同士なのかもしれない。愛することも、愛されることも、それ相応の覚悟がある。でも、互いにその覚悟ができていない。

瑞穂さんを知ることが瑞穂さんを愛することで、それでも瑞穂さんを傷つけないなら、僕は。

でも、互いにその覚悟ができていない。

でも瑞穂さんを傷つけないなら、僕は。

* *

軽い「休憩」だったはずなのに、ホテルのエントランスから外に出ると辺りは真つ暗になっている。

私は愛されてはならない。私にそんな価値はない。礼士さんとお付き合いを始めて数か月が経ち、その安直に冷え切った言葉のあちこちにほころびが生じ、もはや嘘だと隠し切れなくなりつつある。

でも、仮にそれらが崩れたとして、私の過去は変えられない。

覚悟。決断。聞こえのいい言葉だが、それはその言葉の持ち主に痛みを与え、それと引き換えに価値をもたらすからだ。

やろうと思えば、真つ白なふりをして礼士さんに愛されることもできるだろう。安っぽい嬉しさに身を委ねることもできるだろう。

私は小さく首を横に振る。それは愛じゃない、欺瞞だ。愛だとしても、長く苦しい偽りの愛だ。

「もう少しだけ待っていてほしい、礼士さん」

「えっ？」

私はようやく、白い吐息混じりに礼士さんの顔を見上げた。

「さっき、私に聞いたでしょ？ ……もう少しだけ、時間をください」

恋人はぱちぱちと垂れ目を瞬かせ、やがて小さく頷いた。そして、私を離すまいとするかのように、大きな手で私の掌を握りしめた。

礼士さんの背後、真つ暗な空から星のように初雪が降ってくる。長く、厳しい冬が来たのだ。

歩き続け、居酒屋（かま田）が見えてきた。私は礼士さんに手を振り、明るい店内に入った。

* *

ホテルの外は真つ暗になっていた。日を追うごとに夜の訪れが早くなっている。

瑞穂さんは僕の隣で、少し思いつめたような表情で歩いている。変な事を聞いてしまったな、とちよつと後悔しながら僕も歩調を合わせる。

「もう少しだけ」

恋人は唐突に口を開き、切れ長の目で僕を見上げる。

「待っていてほしい、礼士さん」

少し理解が追い付かなかった僕を引っ張るかのように、瑞穂さんは言葉を繋げる。

「さっき、私に聞いたでしょ？ ……もう少しだけ、時間をください」

……それもそうだ。性急に答えを出す必要も無い。時間はあるし、ゆっくり考えればいい。焦って答えを出したところで、互いの覚悟は追い付かないのだから。

瑞穂さんが何かに気付いたかのように僕の頭上を見上げる。

雪だ。ついに、冬の白い悪魔が秋田にやってきたのだ。

音も無く、全てを冷たく蝕んでいく季節が迫っている。

僕は、瑞穂さんの暖かな手をぎゅっと握りしめた。

歩き続け、居酒屋が見えてくる。電気看板には灯が入られ、ふわふわと舞い落ちる雪を照らしている。

「じゃあ、今日はありがとう」

「こちらこそ。楽しかったよ、瑞穂さん」

「ええ、私も。またね」

瑞穂さんは手を一振りし、店の中に消えた。僕は踵を返し、明日に備えて早く寝ることにした。明日は始発だ。

この時、僕は知らなかった。降り積もった白い悪魔が、事件を、そして酷な運命をもたらすとは。